大学医学図書館員による正規授業での利用者教育の現状

磯部恵利子*

元筑波大学図書館情報専門学群 山本研究室

I. はじめに

現代では氾濫した情報を整理し活用するために、全ての人々に情報リテラシー教育が必要とされている。一方、医学界では、近年、電子ジャーナル等の電子情報が増大している。しかし、情報がありながら医師が必要な情報をすぐに得られないということでは、致命的なことになりかねない。また、最近、医学部では「21世紀における医学・歯学教育の改善方策について－学部教育の再構築のために－¹⁾」にみられるように、その教育カリキュラムが新しくなりつつある。今までの情報詰め込み型から知識を使って問題を発見し自ら解決する能力を育成することを新たな目標としている。そのためにも、医師になるべく勉強している医学生は、医学情報に関する情報リテラシー教育を必ず受けるべきであり、それは医学情報についての専門家である医学図書館員が教えるべきではないかと考える。特に、大学図書館の司書は大学教育を情報面で支援する役割を持ち、これから司書の存在意義をアピールしていく上でも、積極的に正規授業に関わっていくことはとても重要である。

そこで、筆者は医学図書館の利用者教育に関心を持ち、特に大学医学図書館員による正規授業での利用者教育について、まずは文献調査を行った。文献調査では、正規授業での実施例を調べることはできたが、わが国の大学医学図書館全体の実施状況について調査したものは見つけることができなかった。このような趣旨に近い調査例としては、松村真司他による「Evidence-based Medicine (EBM) 教育に関する全国大学医学部・医科大学アンケート調査²⁾」がある。これは東京大学医学教育国際協力研究センターの教員が、全国の大学医学部、医科大学、医学校計80校の医学教育カリキュラム担当者宛に調査票を郵送しEBM教育の現状について調査したもので、調

査対象が教員であり今回の目的である図書館員とは対象者が異なっている。そこで本調査では、大学医学図書館員による正規授業での利用者教育の実施状況について、大学医学図書館を対象に調査票による郵送調査を実施することにした。

II. 調査方法

1. 調査対象

利用者に医学部の学生を含む図書館に対して調査しようと考えたため、前述の「Evidence-based Medicine (EBM) 教育に関する全国大学医学部・医科大学アンケート調査」の調査にならい、全国の大学医学部、医科大学、医学校計80校の大学医学図書館を調査対象とした。80校を設置主体別にみると、国立大学法人42校、公立大学8校、私立大学29校、大学校1校である。各大学医学図書館の住所や図書館の正式名称は、2003年版の『図書館年鑑』³⁾と『日本医学図書館協会加盟館統計』⁴⁾で確認した。また、最近では国立大学の独立法人化に伴い大学の統合が行われており名称変更なども多いと考えられ、更に各大学のホームページで最新の大学の名称、図書館の名称、住所、電話番号を確認した。利用者教育を担当する部門の名称は各図書館で異なると考え、宛先は各大学医学図書館の主任司書宛とした。

2. 今回の調査における「利用者教育」の定義

調査票を郵送する際、今回の調査の主旨やこの調査における利用者教育の定義について明らかにするために、別紙を同封した。この調査ではなるべく広い範囲で図書館員が正規授業で行っている利用者教育の実態を調査したいと考え、その別紙には利用者教育の定義を「情報リテラシー教育と言われるものも含みPCや基本ソフトの使い方、OPACの利用方法、医学文献データベースの使用法など、図書館で利用者にとって必要な教育と思われる内容は総て含まれると考える」とした。

*Eriko ISOBE : 〒305-8055 茨城県つくば市春日1-2.

(2005年5月30日 受理)

3. 調査項目

調査項目は大きく分けて、全員が回答する項目と正規授業での利用者教育の実施状況別に回答する部分に分けた。

全員が回答する項目は、次の4項目である。

- ①回答者の情報（所属図書館名、担当係名、氏名、e-mail address）
- ②司書の人数（正職員、臨時職員等の非常勤職員、派遣職員別数）
- ③正規授業における利用者教育の実施状況
- ④この調査に関しての意見・感想など

①の回答者の情報については、図書館設置主体大学の情報を収集することや、未回答部分の問合せのために必須項目とした。

③の図書館員による正規授業での利用者教育の実施状況は、次の4種類に分類した。

- i) 現在実施している
- ii) 過去に実施していたが、現在は実施していない
- iii) 過去にも現在も実施していないが、実施したいと思っている
- iv) 過去にも現在にも実施していないが、実施したいとは思わない

③のそれぞれに対し、次のような質問項目を用意した

- i) 現在実施している
 - ・現在実施している授業の内容（内容については記述式、最大3科目）
 - ・授業を担当するようになったきっかけ
 - ・図書館員が利用者教育を実施するメリット
 - ・講習会と授業の違い
 - ・授業を実施するうえでの問題点
 - ・授業を行うために必要な図書館員の資質
 - ・授業を実施するために参考としている資料やガイドライン
 - ・新カリキュラムによる影響
- ii) 過去に実施していたが、現在は実施していない
 - ・現在実施されていない理由
 - ・以下 i) の質問項目と同じ
- iii) 過去にも現在も実施していないが、実施したいと思っている
 - ・現在実施していない理由
 - ・上記の理由を解決するために実施していること（記述式）
- iv) 過去にも現在にも実施していないが、実施したいとは思わない

・現在実施していない理由

選択肢から回答を選択する設問では、その選択肢の中で最も合うもの一つについて選択してもらうことにした。

4. 調査期間

調査票は、平成16年9月30日に郵送発送した。調査票とあわせて返信用封筒を同封し、返送の締め切りは、平成16年10月22日必着とした。

Ⅲ. 調査結果

1. 調査票の回収状況

調査票は平成16年9月30日に郵送した。翌週の10月4日には、調査票を郵送した各大学医学図書館の主任司書に電話をかけ、調査票の到着を確認し、改めて調査の依頼をした。調査票の返送の締め切りは10月22日必着としたが、10月25日の時点で調査票の回収数は66件（回収率は82.5%）であった。その後、未返送の図書館に対しては、図書館のホームページの連絡先電子メールアドレス宛に、調査票のファイルを添付して回答返送依頼を行った。その後いくつか回答の返送があり、最後に11月25日に電子メールで調査票の回答を返送してきた図書館が1館あり、最終的には72図書館から回答を得られ、回収率は90%だった。

2. 調査結果

1) 全館共通項目

回答を得られた大学医学図書館の設置主体大学の種類別（国、公、私、大学校）の割合は、発送時の割合とほぼ変わらなかった。司書の人数については、回答を得られた72館を平均すると、正職員は6.4人、臨時職員等の非常勤職員は2.1人、派遣職員は0.4人で正職員の割合が大きかった。

正規授業での利用者教育の実施状況は、本調査で筆者が最も関心のあった設問であるが、現在実施されている図書館は45館あり全体の62%を占めている。過去に実施した図書館も含めると53館で全体の73%にもなることがわかった（図1）。

正規授業において利用者教育を実施したことがない図書館は残りの19館であるが、それらの図書館に対して実施したいかどうかを尋ねると、そのうち半数強の10館では実施したいと思っていることがわかった。

2) 正規授業における利用者教育の実施状況

i) 現在または過去に実施している図書館の実施状況

図1. 利用者教育の実施状況 N=72

に関して

現在図書館員による正規授業での利用者教育を実施している図書館は45館あり、過去には実施していた図書館8館を加えると、実施実績のある図書館は全部で53館あり、全体の73%にものぼる。

ii) 過去に実施していたが、現在は実施していない図書館

該当する図書館は8館。実施しなくなった理由は、「教員からの依頼がなくなった」5館、「その科目がカリキュラムから無くなった」2館、「データベース提供元の業者が担当することになった」1館であった。

iii) 過去にも現在も実施していないが、実施したいと思っている図書館

該当する図書館は10館。その10館に対して実施したいが現在実施していない理由への回答は、「教員からの依頼がない」5.5館、「図書館員は授業カリキュラムに関与することができない」3館、「図書館員の人数が足りない」1館、「実施するために必要な図書館員のスキルがない」0.5館であった。(なお、選択肢の回答は1つのみ選択することとしていたが、1設問に対し複数回答あった場合も無効とはせず、2つ選択した場合はそれぞれ0.5館、3つ選択した場合はそれぞれ0.3館として集計した。)

これらの図書館に対しては、実施を実現するために現在行っていることについて記述式で尋ねたが、「カリキュラム担当の教員に課題を投げかけてある」「教員が実施しているので、図書館員は個別指導を行っている」がそれぞれ1館で、「特になし」または記述無しが8館であった。

iv) 過去にも現在にも実施していなくて、今後も実施したいとは思わない図書館

該当する図書館は9館。実施していない主な理由は、「準備・実施のための負担(人・時間)が大きい」が3館、

「図書館主催の各種講習会があるので十分」「学内の他館で実施している」がそれぞれ2館、「教員が行っている」ので必要ない」「年間の授業内容の計画がたたない」がそれぞれ1館であった。

3) 現在または過去に正規授業で利用者教育を実施している図書館の実施状況について

正規授業を図書館員が担当するようになったきっかけは、「教員からの依頼」が45館で85%を占め圧倒的に多かったが、「図書館員からの働きかけによる」とした図書館も7館あった。

いつごろから正規授業を図書館員が担当することになったかについては、1997年以降に開始された図書館が53館中32館あり、これは全体の60%である。

図書館員が正規授業で利用者教育を行うメリットは、「学生に図書館の使い方と図書館員をよく知ってもらえる」が23.6館、「利用者教育については教員よりも、より専門的に教えられる」が20.3館で、この2つで83%を占めている。

図書館主催の講習会と授業で行う場合の違いについては、「講習会を開催しても学部生は殆ど参加しない」が24館、「授業と講習会では目的が違う」が16館で、この2つで75%を占める。

図書館員が授業で利用者教育を行う上での問題点では、これは予想通り「授業準備や授業に割く労力が負担」になっている場合が一番多く17館で、「実習環境が整わない」が9館、以下「対象人数が多すぎる」6館、「授業を担当する図書館員の教育」5館、「教員と連携した授業ができない」4.5館、「毎年継続してできるかどうかわからない」3.5館と続く。

正規授業で利用者教育を実施する際に図書館員に必要とされる資質については「医学情報専門知識」が36.5館で69%と半数以上を占め、ついで「教員とのコミュニケーション能力」6館、「教授法、プレゼンテーションや話法のテクニック等」5館と続く。

授業を実施する際に参考としているガイドラインや資料は、「講習会資料」を主に参考になっている場合が多く13館あった。以下「他館の実施例」11館、「特定のデータベースのマニュアルや解説書」が10館と続く。また、「図書館利用者ハンドブック・大学図書館版」を参考にしている図書館も4館あった。

医学部の新カリキュラムに伴う正規授業での利用者教育の変化については、「特に変化がない」が一番多く33館であった。しかし、またこの新カリキュラムの導入によって7館では教員から授業を担当するように依頼が

あったと回答している。

4) 現在または過去に実施された授業科目の内容について

その図書館で図書館員が担当している（過去に担当した場合も含む）授業科目数は、「1科目」が一番多く26館で、「2科目」13館、「3科目」7館であった。「4科目以上」実施しているところも7館あった。

ここからは、授業科目の内容についての調査結果である。授業科目の内容については、最大3科目まで記入できるようになっており、4科目以上の場合は最新のものから3科目記入してもらった。何らかの記入があった授業科目の総件数は93科目であった。そのうち、現在実施されているものは80科目、過去に実施されたものは13科目である。

記入された授業科目名と授業内容（記述式）から、専門科目か教養科目か判断できるもの91科目中72科目は専門科目であった。

授業を行っている対象について。対象学生の所属は、最も多いのが「医学部医学科」39科目、「医学部他学科（看護学科、保健衛生学科等）」39科目とならび、次いで「大学院生」13科目であった。対象の学年については、「3年生」が26科目と1番多く、「1年生」24科目、「2年生」15科目と続く。

授業科目の内容について記述式にしたため、全ての内容を網羅できるように図2のように6種類の分類項目を用意し、それぞれ当てはまるものをチェックしていった。有効な回答科目数は91科目であったが、1科目について複数の分類項目が当てはまる場合もあった。文献検索として分類した科目は76科目あったが、そのうち特定のデータベースの記述があるものは41科目あった。特定のデータベースとしては、PubMedや医中誌を扱っているものが多かった。

その授業科目が必修科目か選択科目かという設問では、必修科目が65科目あり70%を占める。

授業の定員は、医学部医学科の入学定員が90人前後

図2. 授業科目の内容 N=91（重複回答あり）

であり、必修科目となると必然的に定員はその数に近くなる。有効回答数90件の平均をとると72.7人であった。

その科目の授業時間の中でも図書館員が担当する時間を何分間、何コマ、何回担当しているかと尋ねたが、有効回答数92件の平均をとると87.2分を1.4コマ、2回担当するという結果になった。調査票を個別に見ても、90分授業の2コマ分を担当するケースが多いようであった。

授業を実施する上で、図書館員が担当する割合については、準備の段階から成績評価まで図書館員が全部担当する場合と教員と協力して行っている場合に分け、協力して実施している場合は、図書館員が担当している割合を%で記述してもらった。結果として、図書館員が全部担当する場合と教員と協力して実施している場合は、有効回答数88科目のうち44科目ずつで半数ずつであった。協力して実施するケースでは、図書館員の担当の割合は約66%で、成績評価は担当しないケースが多かった。

IV. 考察

1. 調査結果に対する考察

今回の郵送による調査票調査では、回答者の情報を記名式にしたにもかかわらず、調査対象の医学部のある大学医学図書館全80館のうち72館から回答を回収することができた（回収率90%）。対象図書館に対する現状を把握するためには十分な回収ができたと考える。この要因としては、調査票の宛先を単に図書館とせず司書の責任者である主任司書宛にしたこと、調査票の到着の頃に電話で到着を確認し、改めて調査依頼をお願いしたこと、それから各大学医学図書館では利用者教育に関心があることなどがあげられると思う。

今回の調査で特に筆者が関心をもっていたのは次の項目である。

- ①正規授業で利用者教育を実施している図書館の割合
- ②正規授業を担当するようになったきっかけ
- ③図書館員が授業を担当するメリット
- ④現状の問題点
- ⑤正規授業を実施していない図書館では、その理由

①の正規授業で利用者教育を実施している図書館の割合は62%で、過去に実施していた図書館も含めると73%にものぼり、文献調査の実施例などから筆者が類推していた割合より高かった。医学系以外の大学図書館での利用者教育の割合については調査していないが、比較的高い方ではないだろうか。これも類推であるが、医学図書館では学部学生以外の大学院生や医師に対しての講習会による利用者教育の実績が豊富であり、それが学

部学生に対する正規授業を担当する経緯に繋がるのではないかと考えられる。

②の授業を実施するようになったきっかけとしては「教員からの依頼」が85%を占めており図書館員に主体性がないように受け取られてしまいそうである。しかし、授業カリキュラムに図書館員が関与できにくい現状では、最終的には「教員からの依頼」となるが、今回の調査票では、教員から依頼を受けるまでの図書館員の実績や働きかけ等が数値として出にくい設問だったかもしれないと反省している。それでも、53館中7館では「図書館員からの働きかけ」としているのは、頼もしい限りである。

③の図書館員が担当するメリットとしては、「学生に図書館の使い方と図書館員をよく知ってもらえる」が一番多く23.6館（45%）で、「教員よりも利用者教育についてはより専門的に教えられる」が20.3館（38%）と続く。これは、学部学生から大学院生、研修医、医師、教員まで医学図書館にかかわる利用者をトータルに見ている図書館員ならではの回答であると思う。逆に言えば、授業で教える機会がなければ多くの学生は図書館の使い方、すなわち情報の活用の仕方が十分でないまま卒業してしまうということではないだろうか。また、「その他」に記述された意見として興味深いことに、次の2つの意見があった。

- ・インフォメーションリテラシーを教えるのは司書の役割
- ・大学の中で図書館は教育研究にとって最も重要なインフラであるという認識を広めることができる

この設問では学生側に立ったメリットばかり考えていたが、図書館側のメリットも合わせて考えるべきであった。

④の授業で実施する上での問題点としては、これは事前の予想通りに「授業準備、授業に割く労力が大きな負担となる」が一番多く53館中17館であった。フリーコメントでも、図書館員の人員の削減については述べられており、通常の医学図書館の業務上の優先順位では利用者教育はあまり高くはないと考えられる。実際、筆者も、2004年7月に都内の大学医学図書館で図書館実習を3週間させていただいたが、予算要求や雑誌の定期購読更新時期とも重なり、利用者教育以外の日常的業務で非常に忙しいということがよくわかった。しかし、大学図書館の司書の専門的な業務としては、後にあげる理由のように、正規授業での利用者教育の優先順位をもっと高くすべきであると思う。

⑤の正規授業で実施していない理由としては、大きく分けて次の2つになる。

- ・実施する必要がない
- ・実施したいが理由があって実施できない

実施する必要がないと考える図書館は、実施したことがない図書館19館中9館あった。「準備・実施のための負担が大きい」、「講習会で十分」、「学内の他館で実施している」などの理由が並ぶ。実施したいと考えている図書館でも実施していない理由としては、「教員からの依頼がない」、「図書館員はカリキュラムに関与することができない」などで、それを解決するために現在実施していることとしては、「記入なし」と「特になし」を合わせて10館中8館を占め、実に消極的な様子が伺える。

2. 図書館員の専門性と利用者教育

毛利和弘の「特集：図書館の利用教育をどう進めるか、専門性確立に不可欠な図書館利用教育⁵⁾」によれば、「図書館業務は、非専門職領域業務と専門職領域業務に区分することが必要である」と述べられている。さらに要約すると次の内容が述べられている。

「殆どの図書館では、司書資格の有無に関係なく前述2つの業務が明確に区分されることなく政策上長く行われてきた。また、政策のみならず勤務条件の悪化などから館員自身は専門性を叫びつつも、館員自身が専門性を希薄にさせている行動も見られた。大切にしなければいけない視点は、図書館員の専門性を認知するのは図書館員ではなく、あくまで利用者であり、社会そのものであるということを強く認識することにある。司書職の専門性を確立することは決して容易な道のりではないが、高度情報化時代や生涯学習時代は、今までになかったチャンスであることを見逃してはならない。利用教育を行うことによって、専門職領域業務へ利用者のニーズが高まり、図書館側もそれに対応する必要が出てくる。また、それによって館員も専門性を高める研修や自己研鑽が不可欠となり、良い循環が生まれる。」

図書館員にかかる初期の負担は大きいかもしれないが、人員削減が進む中図書館員自身が利用者教育を実施することで、その専門性を高め課題を解決していくというこの意見は、利用者教育の課題の一つの回答になると考える。

3. 今回の調査票の設問に対する考察

今回筆者は初めて調査票による調査を行ったが、いろいろ課題が残った。まず、調査票の発送時期であるが、

図書館毎に多少事情が異なるかもしれないが、夏から秋にかけての時期は図書館の繁忙期でやめてほしいという意見が2件あった。また、調査方法については今回郵送で調査票を送付し、郵送で返送する形式にしたが、電子メールでの発送・返送を求める意見も1件あり、督促した際も電子メールでの返送が2件あった。今回調査票の処理に際して不明な点も後に確認できるので、回答者の情報（所属図書館名、部署名、担当係名、氏名、e-mail address）を必ず記入してもらったが、「回答するに際しストレスになるので、記入は必須にしないでほしい」というコメントがあったが、回収された調査票には全て回答者の情報が記載されていることにより、その後記載不備のかなりの部分を補うことができた。

「利用者教育の定義」については、当初医学関係のみに絞ろうと考えたが、図書館員がかかわっているものは全て把握しようと考え、前述の定義のように利用者教育の範囲を広くした。結果的には、専門科目として医学情報関連のデータベースに関する授業を実施している図書館が殆どであったが。また、当初受講対象学生としては医学部医学科の学生を想定して事前調査を行ってきたが、今や医学部といっても医学科だけの単科ではなく、看護学科、保健衛生学科などの複数学科を含んでいる大学がかなりあり、この点は不勉強であった。実施されている利用者教育の対象学生の医学部医学科の割合と医学部他学科の割合はともに41%であった。

授業内容に関しては、調査結果に分類したような項目を用意して選択してもらうつもりであったが、項目についての詳しい定義の説明が必要と考え、調査票のスペース的な問題もあり記述式としたが、集計が正確なものにならなかったと思う。反対に、集計のしやすさから、選択式の設問を択一式にしてしまったが、1つに絞りにくいため回答しにくかったというコメントが4件もあり、これも反省点である。

今までいくつか述べてきたが、調査票の最後には本調査に関する回答者の意見や感想をフリーコメントとして記述する欄を設けたが、これも28館の回答者から何らかのコメントをいただくことができ、それも複数の項目について述べている方も多かった。特に、「利用者教育」の定義についてと図書館における利用者教育のあり方についての意見では興味深いものが多く、大学医学図書館員の仕事に対する熱意を感じた。

V. おわりに

本調査は、筑波大学図書館情報専門学群2004年度卒

業研究「大学医学図書館員による正規授業での利用者教育の現状」（指導教官：山本順一教授）の郵送調査票調査の部分を主にまとめたものである。筆者は3年次社会人編入生であったが、社会人として医療関係に従事していたわけではなく、医療に関しては患者として関わるのみであり、医学図書館に足を踏み入れたこともなかった。今回卒業研究に取り組むにあたり、LATCH サービス（Literature Attached To the Charts Service：臨床医が診療したカルテを医学図書館員に回付し、これを見た図書館員が関係する最新の医学文献を添付して、当該医師にまわすというサービス⁶⁾）に興味を持ったことから医学図書館の司書の役割について文献調査を実施した。そして、利用者教育はその中でも最も重要となっていくと考え本調査を進めた。

郵送による調査票調査に先立ち、都内の4私立大学医学図書館にお忙しい中ご協力いただいて個別訪問調査を実施し、大学医学図書館の司書の方から直接話を伺うことができた。今回の調査票は、個別訪問調査の質問票をベースに作成した。

また、今回の調査は、調査票を返送していただいた大学医学図書館の方々のご協力なしには成り立たないものであった。対象を80図書館と絞ってしまったため、そのうち何館から回答が返送されるかとても不安であったが、その点では十分な回答数を得ることができたと思う。この場をかりて、ご協力いただいた大学医学図書館の方々へ厚くお礼を申し上げたい。

大学ごとに医学部の新カリキュラムへの移行もまちまちであり、それぞれの大学医学図書館によって異なる状況にあると思うが、医療を担う医学関係の学生の利用者教育を行うといった点では共通していると思う。医学部の新カリキュラムの導入で、EBM教育、PBL（Problem Based Learning）、チュートリアル教育が進められていくとともに、利用者教育を図書館員が担当する機会も増えていくと考えられる。この調査結果をもとに、大学医学図書館員が学生の教育を支援する点で、もっと積極的な活動ができることがあれば幸いである。

最後に、これは筆者の重要な関心事でもあったが、図書館員が正規授業で利用者教育を実施する意義についての回答の一つになると思われる、裏田和夫氏が書かれた「図書館員の力量を見せる⁷⁾」と題された文章の一部を紹介して本論文の結びとしたい。

「私たちは医師をはじめとする医学・医療関係者に良き情報サービスを提供する立場にある。彼らに従属的である図書館員も少なくない。しかし、医学情報を担当す

る専門職として彼らに挑戦をしなくてはならない。対等な勝負をするためには図書館員自身が勉学を熱心にし、そこで鍛えた力量で挑戦するのである。それで医療関係者は満足する。」

参考文献

- 1) 医学・歯学教育の在り方に関する調査研究協力者会議. 21世紀における医学・歯学教育の改善方策について—学部教育の再構築のために—[internet]. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/13/03/ishigaku.pdf [accessed 2004-05-06]
- 2) 松村真司, 大野每子, 福原俊一, 加我君孝. Evidence-based Medicine(EBM)教育に関する全国医学部・医科大学アンケート調査. 医学教育 2001;32(3):173-8.
- 3) 日本図書館協会図書館年鑑編集委員会編. 図書館年鑑(2003). 東京:日本図書館協会;2003.
- 4) 日本医学図書館協会編. 第73次日本医学図書館加盟館統計. 東京:日本医学図書館協会;2003.
- 5) 毛利和弘. 特集:図書館利用教育をどう進めるか, 専門性確立に不可欠な図書館利用教育. 図書館雑誌 2000;94(3):156-8.
- 6) 山本順一. 電子時代の著作権. (図書館・情報メディア双書;第5巻). 東京:勉誠出版;1999.p.143.
- 7) 裏田和夫. わたしの歩いてきた道. 医学図書館 2003;50(2):99.

Current State of User Education in Regular Classes by Medical School Librarians

Eriko ISOBE

Yamamoto Lab., School of Library and Information Science University of Tsukuba. 1-2 Kasuga, Tsukuba-shi, Ibaraki 305-8550, Japan

Abstract : The use of electronic information has been increasing in medical science. Medical students need to know how to get the information that they want. Medical librarians are specialists on medical information and must be able to help medical students find what they need. Consequently, medical school librarians should provide user education opportunities, including topics on information literacy in regular classes. Questionnaires were mailed to 80 medical school libraries. 72 libraries (90%) responded. In 45 of these libraries (62%), librarians are presently teaching user education in regular classes and in 8 of them (11%), librarians were teaching before. The major reason why the librarians had started to teach such classes was because of requests from teachers. In 17 of 32

libraries (32%), the librarians felt that teaching regular classes was very hard work because it takes much time to prepare for teaching. Most librarians are teaching medical literature retrieval. The results of the survey seem to show that most medical librarians wrestle with teaching user education in regular classes. Whether librarians continue to teach such topics in regular classes depends on the opinions of teachers and it is an important issue in future.

Key words : Education, Medical Undergraduate; Information Storage and Retrieval; Libraries, Medical; Questionnaires; Computer Literacy
(*Igaku Toshokan* 2005;52(3):263-269)